

Title	糸屋寿雄著 幸徳秋水研究
Sub Title	A study on Shusui Kotoku, by Toshio Itoya
Author	小松, 隆二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.2 (1968. 2) ,p.255(145)- 261(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19680201-0145
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680201-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

その資料的な価値と実証性にもかかわらず、理論的な整理が必ずしも充分とはいえない。すなわち、さきにも指摘したように、前半においては問題意識が鮮明で、帝国主義段階における労働問題の特殊性についての理論的考察がなされているのであるが、後半においては、資料負けの感が深く、資料の解説に終始しており、叙述が単調である。第四章、第五章、第六章以下の叙述にみる叙述の単純性、本書の前半にみられた理論的分析の鋭さが、後半において、その資料的豊富さのなかにかくされてしまったのは何故であろうか。そのひとつの原因は、労働市場と賃金水準、賃金構造、賃金形態および労働組合運動の各項目が、バラバラに並列的にとりあげられているだけで、これら相互の間の関係、これらの諸関係の法則的な把握がみられないことである。これは、著者が、現代のわが国における労働問題研究において、その研究水準の見事な向上にもかかわらず、ともすればバラバラになろうとする各研究分野、すなわち、労働市場論、賃金論、労使関係論、社会保障論、労働組合論——本来、「労働問題」として把握されるべきこれらの分野——を統一的に把握しようとする苦闘のあらわれであることは高く評価しなければならぬのであるが、この試みは、著者の努力にもかかわらず、本書においても成功しているとはいえない。これをつきつめていくと第二の問題となるのである。——帝国主義段階における労働問題の展開——のために、機械工業をえらんだ意図は斬新であることはいうまでもないが、しかし、帝国主義段階の労働問題において画期的な役割を果たしたのは、炭鉱労働者を先頭とする不熟練労働者とその組合である

ることは周知の事実である。だとすれば、こうした労働者階級の状態およびその組合といわば労働貴族的存在としての機械工の比較対照の欠如が、著者の意図をいちじるしく稀薄なものとしたとはいえないだろうか。少なくとも、第七章において、この点を十分に強調すべきであった。また帝国主義段階における機械工業についてふれる場合、ミッドランドに広く散在している中小経営とこの上に聳立する大企業との支配・従属の関係、まさしくシドニー・ポラードがとりあげたような問題および視角が少しはふれられているが、ほとんど閑却されているのは何故であろうか。この問題を無視しては、帝国主義段階における労働問題を正しく把握できないように思う。すなわち機械工業における賃金水準・賃金構造などの労働条件の分析においては、きわめて周到な注意が払われているのであるが、その分析の焦点は機械工業内部の各職種を中心とする側面にとどまっており、機械工業自体の構造の独占資本主義段階Ⅱ帝国主義段階における変貌、資本の集積・集中にともなう巨大独占企業の成立、それに必然的に伴う労働諸条件の企業間格差の拡大については、ほとんどふれていない。もちろん、それについて著者は、「企業別格差を直接示すようなデータはほとんどない。問題意識の欠如は、この種の格差が当時のイギリスにおいて概して重大なものではなかった、ということを物語っている」とのべ、産業別格差についてもほぼ同様なことをのべているが、(二三六頁、二四五頁)それは事実であるとしても、本書が、その副題として、とりわけ、「帝国主義段階における労働問題の展開」(丸点筆者)と限定している以

上、今少し、この問題について配慮できなかったのであろうか。最後にいまの問題にも関係があるのであるが、著者は、「はしがき」においてのべたように、従来のわが国に根強くみられた政治至上主義的ないし政治追従的な労働問題の研究の態度に批判的態度をとられる。これは正しい。しかしそれがあまりにも自己抑制的となり、まさしく、帝国主義段階における労働問題をとらえる場合に、この時期における労働組合運動の位置づけについては成功しているとはいえない。ここでも、やはりさきの場合と同じく、「帝国主義段階」とはいかなる「段階」であるかという基本的な視点の認識において、必ずしも充分とはいえない面がありはしないか。第七章が宙に浮いていて全体を総括する形になっていない。

以上、失礼をも顧みず、かなり思いきった批判を試みたが、しかし本書は、戦後のわが国にあらわれた外国の労働問題の研究において、まず第一に指を屈すべき力作であろう。筆者も啓発されることきわめて多く、とくに、労働問題研究の方法として、賃金、労資関係、労務管理、労働組合、社会保障を統一的に把握することの必要を痛切に教えられた。著者の広大な視野と大胆な着想、綿密な分析力に深く敬意を表するとともに、このつたない批判が著者を傷つけ、あるいはいぢめるしいのはずれではなかったかをひたすらにおそれる。著者の懇篤な御教導をお願い致す次第である。(法政大学出版局・一九六七年七月刊・A5・三七一頁・一、二〇〇円)

〈追記〉 わたくしは、本書出版直後、著者から寄贈をうけ、また図書館新聞から簡単な批評を依頼されたのであったが、当時は病氣中のこ

とではあり、十分に読む機会もなく、心ならずも不十分な書評を書いてしまった。後に、本書をゆっくり目を通す機会をえて、ここに改めて批評と紹介の一文を書かせていただいた次第です。この点、著者にその非礼をお詫び致します。

糸屋寿雄著

『幸徳秋水研究』

小松隆 二一

わが国における社会主義運動、アナキズム運動の草分けの一人であった幸徳秋水については、これまで必ずしもその全体像が明らかにされたとはいえないだろう。大逆事件という衝撃的な事件との結びつきもあって、戦前においては幸徳に関する研究のものはほとんどみられなかった。しかし、戦後にいたって社会主義運動・労働運動の基礎史料が公けにされるにつれ、幸徳についての研究も漸く進展をみるようになった。

そのような中で、幸徳に関するまとまった研究としての先鞭をつけたのが、本書の著者である糸屋氏の『幸徳秋水伝』(一九五〇年)であった。そして、その後の諸成果を吸収しつつ旧著を発展させ、ここに再び幸徳についての労作を発表されたわけである。従来、幸徳

研究といつても、ややもすれば幸徳の思想そのものの解明よりも、事件の歴史的役割や再審請求の進行ということもあって、大逆事件の解明に比重がかけられすぎたきらいもあった。しかし、本書の著者は、思想家としての幸徳に焦点をあわせ、その功罪をありのまま究明せんとする姿勢でのぞんでおり、この点でも本書は注目に値するものである。

以下に、必ずしも本書の構成・順序にとらわれるものではないが、まず本書の内容を概観し、ついでその中からいくつか私なりで関心をもつ問題を取りだして、論評を加えてみることにしたい。

2

著者は、本書の上梓にあたって「今回、旧稿の『幸徳秋水伝』を全部根本的に書き改め」(二頁) ということ姿勢を明らかにしているが、本書が旧著を下敷にしていることもいうまでもない。例えば、後述するように幸徳の生涯をみる際に基本となる時期区分にしても、旧著の区分をそのまま踏襲しており、ほかにも歴史の流れを越えて現在も変らぬ評価・観点もいくつかそのまま生かされている。しかし、著者もいうとおり、殊に幸徳の生涯の前半期、あるいは大逆事件に関する部分では、新しい資料・新しい評価を取り入れて旧著をさらに発展させた面の強いことも断るまでもない。

さて、著者は本書の意図するところを次のように述べている。「本書はこれら最近の新材料を駆使し、新しい研究の成果を摂取しつ

つ、日本社会主義思想史上における幸徳秋水の思想の位置づけと、その社会主義運動史上における歴史的意義を明らかにすることを究極の目標としている」(二五頁)。このような意図のもとに本書は次のごとく構成されている。

- 序論 幸徳秋水研究の課題
- 第一章 幸徳秋水研究の回顧
- 第二章 本書における秋水研究の課題
- 第三章 秋水研究の構成(秋水伝の区分)
- 第四章 幸徳秋水研究の史料
- 第一篇 自由民権運動と幸徳の少年時代
- 第一章 幸徳の少年時代
- 第二章 中江兆民門下として
- 第二篇 日本における労働者階級の登場
- 第一章 日本資本主義の発達と労働運動の勃興
- 第二章 日本における社会主義思想の発達
- 第三篇 社会主義への道
- 第一章 幸徳の社会主義的傾斜
- 第二章 明治思想史上における幸徳
- 第四篇 日露戦争における平民社の非戦運動と幸徳
- 第一章 「平民新聞」の発刊と非戦論
- 第二章 弾圧迫害と「平民新聞」の廃刊
- 第五篇 日本社会運動の方向転換——直接行動論
- 第一章 入獄と亡命

第二章 日本社会運動の方向転換

第三篇 赤旗事件と西園寺内閣の毒殺

第六篇 大逆事件の真相と幸徳の処刑

第一章 いわゆる明科事件の真相と幸徳

第二章 事件の発覚、検挙と当局の拡大方針

第三章 公判廷と死刑宣告における幸徳

結論 幸徳秋水の思想の歴史的意義

第一章 思想家としての幸徳秋水

第二章 幸徳の思想の客観的位置

この構成は、幸徳の四一年にわたる生涯を六期にわたる著者の時期区分にもとづくものであり、その時期区分が著者の論述の基礎となるものであることはくり返すまでもない。そこでこの時期区分にそって本書の内容を紹介してみよう。

まず第一期は、一八七一年の誕生から一八八七年までの一七年間、秋水の成長の時代であり、思想家となるまでの準備の時代である(二七頁)。幸徳が生まれ、成長した土地が維新以来のわが国の進路にとって重要な役割を演じてき、さらに林有造、中江兆民、板垣退助らを擁して反政府運動あるいは自由民権運動の牙城となった土佐であったこと、そして彼の一族のものもそのような時代の風雲にまぎこまれる地位にあったこと等が感受性の強い幸徳を社会的にめざめさせることになった。このような幼年時代が、その歴史的背景の描写とあいまって、これまでのいくつかの幸徳伝にみられない緻密さをもって展開されている。

そして、この第一期の終り頃に保安条例のとばっちり、身をもって藩閥政府の弾圧を経験し、後の権威・権力に対する抵抗精神の萌芽もこの時代にすでに宿すことになるわけである。第二期は、東京を追われた後、兆民の学僕となる一八八八年から、社会問題研究会に入会する一八九七年までの「彼の修業時代」(二七頁)である。この時期は中江兆民の書生時代といってよいが、明治憲法を「通説一べんただ苦笑するのみ」(九二頁)と酷評するなど徹底した民権論にたっていた兆民のごときよき師につかえたことが幸徳を思想的にも人間的にも大きく成長させることになった。従って、著者もこの時期については兆民とのかかわりあい、幸徳を浮き彫りする手法をとっている。

この時期で注目すべきことは、「幸徳の唯物論的世界観は、こうした兆民の影響下に形成されて行った」(九六頁)だけでなく、晩年の彼の思想となるアナキズムの芽もこの兆民との接触の中で培われていたといえるのではないかとということである。すなわち、兆民は、あの当時にあつても主従的關係や身分的階級・位階を全く否定し、また人民の自由・平等を尊重して平民主義に徹しようとしたわけであるが、このようなこと、なかならず兆民が議員を辞職して議会上に愛想づかしをしたことなどは、幸徳の議会への不信、軽視的態度に影響するところ少なかつたと思われる。いずれにしても、彼の生涯を決することになる「無冠の帝王」たる新聞記者生活に入るのも、このような環境においてであり、「修業時代」とはいえ、幸徳の生涯における重要な時期であつた。

第三期は、一八九七年から万朝報社を退社する一九〇三年までの、「マルクスを研究し、資本主義の批判に進む時代、自由党左派より社会主義への発展時代である」(二七頁)。幸徳が社会主義に傾斜してゆく過程は、周知のごとく、土佐という土地柄や家族的貧窮といった境遇的な面を土台に、シェッフレの「社会主義真髓」など社会主義文献に影響されてすすめられた。この時期前後については、従米の幸徳伝では背景の叙述のみ先行して幸徳そのものについては不鮮明な記述が多すぎたが、本書では行き届いた整理がなされている。

この第三期は、日露両国の風雲急を告げる中で次の時期にひきつがれることになるが、第四期は平民社を創設する一九〇三年から一九〇五年までの二年間で、「社会主義の実践時代であり、反戦運動の悪戦苦闘時代である」(二七頁)。弾正、ついで入獄と「悪戦苦闘」を続けるこの時期に、幸徳は既存体制を否定する社会主義の立場を堅持するにいたるのであり、彼の生涯における活動の最も華々しくかつ精彩を帯びた時期でもあった。

その後、入獄を転機にして次第に社会主義よりアナキズムへ転化してゆくわけであるが、この時期以後を著者は第五期および六期に区分する。すなわち、第五期は一九〇五年の入獄より土佐に帰郷する一九〇七年までの三年間で、「マルクスの社会主義の研究よりクロボトキンのアナキズムの研究に移り、直接行動論を日本の同志の間に鼓吹した時代である」(二八頁)。そして最後の第六期は、一旦帰郷後上京する一九〇八年より、刑死する一九一一年までの時期で「直接行動の実行時代である」(二八頁)。

は、幸徳の思想的成長を解明するにとどまらず、一編の社会的史的脈がりをもち、明治社会運動史の全貌をも読者に示すという方法をとっている。

ところで、先に述べたように、幸徳は日本の社会主義・アナキズムの紹介および実践において先駆的役割を果たしたといわれながら、従来、思想家としての幸徳、殊にアナキストとしての幸徳については自明のこととして、それ以上深く掘り下げることが少なかつたように思われる。そこで最後に、多少本書とはなれるが、このような点を中心に論評を加えてみたい。

3

幸徳の社会主義、アナキズム、それらを貫く労働者観というものについては、これまで必ずしも整理された形では分析されることがなかった。本書では、幸徳の社会主義についてはそれに傾斜する時期から、さらにそれを堅持するにいたるまでの過程をよくまとめられているものの、アナキズム、労働者観については他の部分の展開にくらべて決して十分とはいえないように思われる。

幸徳のアナキズムについては、本書でも結局のところゼネストと議会否認の二本柱による直接行動論という従来の一般的説明の範囲を踏襲しているといえるが、もちろんそれだけで済ませているのではなく、段階的な相違等に注目していないわけではない。例えば、アメリカより帰国後の「第二回大会をめぐる幸徳の議論は議会無用、議会政策否定の主張が中心であり、アナキズムないし、サン

弾正による活動の制約、アナキズム文献との接触、さらにはアルバート・ジョンソン、フリッチ夫人、IWW等との交流によって深められる幸徳のアナキズムへの傾斜過程は周知のことであり、ここで改めて紹介するまでもないであろう。殊に幸徳とアナキズムについては後に論評を加えるので、ここではこれ以上ふれない。ただ、第六期の大事事件についてのみ簡単にふれると、量的にもまた質的にも本書の白眉をなすのがこの部分である。大事事件というものが、単に一九一〇年という時点のみで理解されているのではなく、国内的には赤旗事件に、国外に眼をやっても一九〇六年の「革命」事件や一九〇八年の「暗殺主義」の檄等にさかのぼり、そこに山県系と西園寺系の対立をおりませながら、巧妙に仕込まれてくる過程として鮮かに描きだされている。すでに「大事事件」(一九六〇年)という労作もあるとおり、著者が大事事件研究でも第一人者であることは説明するまでもないが、ここでは幸徳研究という意味からも、むしろ大事事件に対する精細な記述と共に、幸徳をもう少し表面にだし、幸徳を通じて事件をみる展開が必要であったように思える(この点は第二篇等にもいえることで、歴史的背景の叙述にあたっては、幸徳を通してみるという方法をさらに徹底する必要があったのではないだろうか)。

以上のような時期区分にもとづいて、著者は幸徳の思想と生涯を、社会主義・唯物史観の導入者、反戦平和主義者、反権威主義者、「勤王美談上野曙」にみられる新派劇の先駆者、また秀れた文章家として克明に描き上げているわけである。しかも、その叙述ジカリズムの主張は体系的でもなく、従属的に表現されたにすぎなかった(二三四頁)といい、さらにその後の立場については「社会党第二回大会当時の強力な『直接行動論』の主張は、影がうすれ、革命進化論との関連で、平民の自覚喚起に力点が移行している」(三三五頁)としている。前者については、「議会無用」論は、わが国の現実的あるいは実践的基盤がどうであったとしても、階級対立と労働者階級による直接行動の認識からでてくるはずのものであり、アナキズムが「従属的に表現された」という理解は必ずしも論理的とはいえないように思われる。また後者についても、幸徳のアナキズムの認識は組織論なり抽象論と解釈することもでき、しかも直接行動論と平民の自覚喚起は対立するものではないので、この段階で労働者階級の直接行動論という視点は影がうすくなったという根拠も必ずしも納得的ではない。

また、著者も試みているように、幸徳のアナキズムへの傾斜過程は、段階的に明確化される必要があるだろう。それによってその内容も明確になってくるからである。彼のアナキズムは、入獄を契機にはじめて芽生えたのではなく、すでに兆民との接触時代、あるいは「社会主義神髓」(この段階で代議制への疑問から国民投票、直接発議権の必要を説き、代議制を主権の放棄という見方をしている面もある)にもアナキズムの芽がみられることも注意してよいだろう。とはいえ、その芽が直ちにアナキズムに成育するのではなく、渡米前および滞米中でも明らかにアナキズムと社会主義の同居がみられ、帰国後ますます社会主義的視点を捨てていくのではない。この点著者も帰

国直後の幸徳のアナキズムは体系的なものではないといっているとおりにある。その後、自らはアナキストとして自覚するようになるが、なお党组织に対する理解の不徹底やクロボトキンに主として依拠したことによる戦略・戦術の一面性にみられるとおり、アナキズムの直接行動論という一面的理解であり、しかもそれも抽象論をでず、ましてやアナルコ・サンシカリズムなどといえるまじったものではない。結局のところ、彼のアナキズムは内的発意によるものより、外部的要因による面が強く、先駆者の意味をでるものではない。なかつたといえるのではないかと思う。それだけに、本書の課題をこえるものはあるが、幸徳のアナキズムをさらに深く理解するには、大杉栄、石川三四郎等が国のアナキストたちとの比較も今後当然必要とされるものであろう。

次に直接行動論と切り離しえない問題として、幸徳の労働者観を検討する必要がある。著者は「我は社会主義者也」や「社会主義神髓」の時代の幸徳の労働者観について、「労働者を独立した階級として、その歴史的な役割を評価することが出来ず、貧困で、生活が荒れ、品性が乱れた下層社会の『働く貧乏人』としてしか認識すべきなかつた」(二七九頁)といい、さらに「いまだ労働者階級の、革命的階級としての歴史的役割を認識出来なかつた」と説明している。この説明はこの時点では適切な評としても、その後の幸徳の労働者観としては妥当ではないし、著者はその後の労働者観の発展については必ずしも整理する形ではふれていない。実際にも幸徳の労働者観は「社会主義神髓」の段階で停止しているのではなく、その

後大きく前進をみせているといえるのではないだろうか。一九〇六年の「一波万波」や「世界革命運動の潮流」の段階では、明確に労働者の階級的使命・役割を認識するにいたっており、社会変革の担い手として志士仁人を考えるような理解をぬけていた。さらに一九〇七年の「独乙総選挙と欧州社会党」や「予が思想の変化」でも、直接行動を唱える中で、その担い手を明白に労働者階級としており、その歴史的使命、団結の意味を正しく把握するにいたっているといつてよい。すなわち、幸徳の直接行動論についてはその内容や観点の是非はあるとしても、直接行動論への到達ということが労働者階級の歴史的使命の理解に達していたことを示すものであったと考えるとよいのではないかと思う。

要するに、幸徳はわが国の社会主義およびアナキズム思想の秀れた先駆者であつたわけであるが、先駆者であつたが故に、主義に徹する限り政府・官憲と衝突せざるをえなかつた。運動の黎明期にあつては、筆でたつこと自体実践であり、幸徳のような理論家ですら弾圧の渦にまきこまれざるをえなかつたのである。それが大逆事件へと導かれるわけであるが、だからといってわが国の社会主義・アナキズム運動の先駆者としての、また卓抜した思想家としての幸徳の役割を黎明期の弾圧と渾沌たる渦の中、あるいは衝撃的な事件とはいへ大逆事件の中に埋没させ、悲劇の人という結論のみで終らせてはならないだろう。この点、本書は大逆事件に比重がおかれすぎているとはいへ、幸徳の思想の功罪を余すところなく提示する努力

を払っており、これまでの幸徳伝の中では最も密度の高いものといつてもいいすぎではないように思う。

いずれにしても、幸徳の著作全集の計画も着々とすすめられ、いよいよ彼の全体像を解明する条件がととのいだしている時に、このような労作が公けにされたことは喜ばしいことである。殊に、著者が戦後の幸徳研究において、一七年という歳月を隔てて開拓者の業績と締めくくりに業績の双方を果たしたことに深い敬意を表している。なお、最後に、本書では幸徳に関する史料・文献目録等についても懇切な説明が付され、読者・研究者に有益な方向を与えていることを付け加えておく。

— 二月二日 —

(青木書店・一九六七年七月刊・A5・三五七頁〔索引一三頁〕・一八〇〇円)